

「人の痛みを理解すること」

理事長 大前 繁雄

他人の痛みを本当に理解するというのは、難しいことである。三十六歳の時から政治の道に入った私が、選挙の時にいつも口にしていたのは、「他人の立場に立って」というフレーズであった。ところがある時、私のこのフレーズが口先だけのものであるということ、痛切に悟られる出来事に遭遇した。

ご存知の方も多いと思うが、私の長男は脳性マヒの障害者である。運動機能に障害があるため、すべての動作が健常者のようにスムーズに行かないのである。その長男が養護学校の小学部に入学した頃のある朝、家族揃っての朝食のテーブル、私は出勤前の背広姿で長男の隣に座っていたのだが、牛乳を口一杯に含んだ長男が思うように飲み干すことができず、ピューと私の背広に飛ばしたのである。一張羅を汚された私は怒って、「お前は小学生になっても、まだ牛乳さえちゃんと飲めないのか」と、思い切り長男の頭をたたいたのである。その時の、何もいえない情けない顔で泣きべそをかいていた長男を、今も鮮明におぼえている。

ところが、それから何年か経って私は、歯医者さんの抜歯で長男と同じマヒを体験することになった。ご承知の通り、今は抜歯も楽になって、術前に麻酔をかけるので抜く時の痛みは何も感じない。しかし、抜歯した後が大変である。麻酔が残っているため、うがいをしようとしても口が思うように動かず、水がピューピューと口からもれるのである。この時に初めて私は、マヒというものがどういうものか悟った。そして生まれてこの方、ずっとその不自由なマヒと付き合いながら、日々、生活している長男の苦しみをやっと理解したのである。

以来私は、いくら牛乳で背広を汚されても長男を叱らなくなった。そして、「相手の立場に立って」というフレーズを、より真剣な思いで語るようになったのである。